

研究動向

ハンガリーにおける教父学研究

秋 山 学

2005年夏、第9回オリゲネス学会国際大会（書評欄拙稿をも参照）がハンガリーのペーチで行われたことに関連し、進展目ざましいハンガリーにおける教父学の動向を紹介する。現在の同学界動向は、現ローマ教皇ベネディクト16世も教父学に関しては全幅の信頼を寄せていたという大御所 Vanyó László 師（1942-2003；1975年より没年までブダペシュトのパーズマニ・ペーテル大学教授）の没後、その弟子筋に当たる教父学者たちによる活躍の時期として特徴づけられよう。故ヴァニョー師は、*Az ókeresztény egyház irodalma*（『古代キリスト教会文献』、I（1997）、II（2000））、*Az egyházatyák bibliája és az ókeresztény exegézis módszere, története*（『教父における聖書と古代キリスト教における釈義法・釈義史』、2002）、*Az ókeresztény művészet szimbólumai*（『古代キリスト教芸術の象徴』、1988初版、2001第2版；以上いずれも JEL Kiadó）などの著書で知られ、また主編者としてシリーズ *Ókeresztény Írók*（『古代キリスト教著作家集』、1980-）の編纂に当たった。同叢書は、外典類、使徒教父、殉教者・護教家からオリゲネス、アタナシオス、カッパドキア教父、キュプリアヌス、アウグスティヌスといった主要教父たちまでの原典ハンガリー語訳注集成であり、2005年末現在既刊分は18冊を数える。他に教父原典訳のシリーズとしては Atlantisz 社刊の *A kutnál*（『源泉』）シリーズによる *Az isteni és az emberi természetről, Görög egyházatyák I, II* 1994（『神と人の本性について ギリシア教父篇』）もよい。また、やはりヴァニョー師の創刊になる *Ókeresztény Örökségünk*（『古代キリスト教の遺産』、1996-）は、おもに復活節や降誕節などに行われた教父たちの説教を中心に、ハンガリー語訳を収めるシリーズである。

現在、ハンガリーの教父学者たちは「ハンガリー教父学協会」（Magyar Patrisztikai Társaság）に名を連ね、同協会の活動に参画している（会員数約100名）。同協会は、年次大会を夏に中部のケチケメート市・ピアリスタ会修道院で開催するほか、

新刊書評会を随時ブダペシュトで、また冬には東北部のニーレジハーザ市（後述）で小大会を開いている。現在の会長は、ミシュコルツ大学教授でビザンツ学者の Baán István 師（ギリシア・カトリック司祭）である。同師は Bizantológiai Intézeti Alapítvány（「ビザンツ学研究財団」）の総責任者でもある。

このハンガリー教父学協会の第1回大会における研究報告が、次の1冊に集約されている。STUDIA PATRUM: A Magyar Patrisztikai Társaság I. konferenciája az ókori kereszténységről, sz. Nemeshegyi Péter/Rihmer Zoltán, Szent István Társulat, Budapest 2002. 長年上智大学神学部で教鞭を取られ、社会主義体制崩壊後母国に戻られたネメセギ師は、この教父学協会の長老格として健在であり、上掲書にも「オリゲネスの神と聖書の神」と題する巻頭論考を発表しておられる。一方共編者のリーマー氏は、博覧強記の古文書学者である。

新しい教父学関係の企画としては、Somos Róbert 氏（書評欄参照）および Heidl György 氏というペーチ大学の同僚二名による企画、Catena シリーズ（Paulus Hungarus/Kairosz Kiadó 刊）が目される。ここでは、同叢書に収められたヘイドル氏の著書を紹介しよう。ヘイドル氏はペーチ大学美学講座の主任、1967年生まれという気鋭の若手であり、同叢書の第2巻にあたる *Szent Ágoston megtérése: Egy fejezet az origenizmus történetéből*. Paulus Hungarus-Kairosz, Budapest, 2001（Catena monográfiák 2, A/5 版, 378 頁, 2500 ft）が主著である。『聖アウグスティヌスの回心ーオリゲネス主義史からの断章ー』と題された同書は、アウグスティヌスが、キリスト教的著作活動の初期の頃より既にオリゲネスのいくつかの著作に通じており、彼の初期神学を決定づける諸要因はオリゲネスに遡るのではないか、という主張を、丹念なアウグスティヌス・オリゲネス読解から明らかにした労作である。英語版も米国で出版されたと聞かすが、本人によればハンガリー語版には修正加筆を施したという。第1部「アウグスティヌスの回心」、第2部「アウグスティヌスによる初期の『創世記』注解」、そして第3部「アウグスティヌスによる初期の原初論・終末論」より構成されており、巻末には「補遺」として「『告白』9.2.3における『雅歌』のアレゴリー解釈」「『マタイ福音書』注釈」「ラテン語版オリゲネスー『創世記注解』の痕跡」の3章分が附筆されている。著者は、アウグスティヌスがおそらくオリゲネスの『雅歌講話』『雅歌注解』を読んでいたものと推定し、またオリゲネスの『創世記注解』に関しては、考えられうるラテン語文献（アンブロシウスなど）の介在する余地もないほ

どにまで読み込んでいたのではないかとする。この見解は、400年頃以前アウグスティヌスはオリゲネスをまったく読んでおらず、彼にとってオリゲネスは、アンブロシウスの『ヘクサエメロン』講話や、詳細未詳のミラノの口承伝承を介してしか知られていなかった、とする通説と対立する。分析の対象となるのはまず『アカデメイア派駁論』2.2.5、それに『幸福な生について』および『告白』であり、『駁論』2.2.5に現れる「詩人像」や聖書の寓意的解釈は、オリゲネスの『雅歌講話』から得たものだとして結論づけられる。第2部では388/9年の『マニ教徒駁論創世記論』が考察され、アウグスティヌスが397年以前には読んでいないとされていた『創世記』のラテン語訳と引用字句が一致することから、ここにもオリゲネスの『創世記注解』の影響が認められるとする。「知的天と肉的陸の相違」の見解も、アンブロシウスではなく、『創世記』1.2を『知恵の書』11.18から理解するオリゲネスに遡る。アウグスティヌスによる「二重創造説」（『創世記』1.26；2.7）も、ヒラリウス、アンブロシウス、エルヴィラのグレゴリウスらにではなくオリゲネスに基づく。第3部ではアウグスティヌス初期の原初論・終末論・復活論が考察され、『マニ教徒駁論創世記論』2.8.10における「原初の人間は肉と関わりを持たぬ霊であった」との主張や、「万物が墮罪以前の状況に復興する」という終末論のうちに、オリゲネスと共通の視点が求められる。復活論に関しては、「肉の復活」における「肉」とは地上の4元素を指し、これが無に帰すことはない、とする点にオリゲネスとの一致が模索される。同氏には *A keresztény és a szírének, patrisztikus tanulmányok*, Kairosz, Budapest 2005（『キリスト教とセイレーン』）という新著もある。

上掲のカテナ・シリーズのうち、他に注目される書として、次に女性教父学者たちによる新しい研究を紹介しよう。まず Pesthy Monika, *A Csábítás teológiája*, Kairosz, Budapest 2005（『誘惑』の神学）は、ギリシア・ラテン文献は勿論、死海文書、エチオピア語、コプト語、シリア語資料などを原典で引用し読み解いた労作であり、古代「誘惑」研究としては現在世界最高水準に位置づけられよう。著者のペシュティ女史はヴァーツ市に本拠を置くアボル・ヴィルモシュ大学神学部で教鞭を取る。一方 SÁghy Marianne, *Isten Barátai, Szent és szentéletrajz a késő antikvitásban*, Kairosz, Budapest 2005（『「神の友」—古代後期における聖人と聖人伝』）は、古代の聖人像と聖人伝の形成をめぐる論考であり、シャーギ女史はラテン後期教父に造詣の深い気鋭の教父学者である（ELTE 大学人文学部教授）。評者は、教父学協会の例会

として開催された同書の書評会（2005.12.15）に出席したが、上掲のバーン会長が書評を披露された。書評会にて、同書と併せ対象に挙がっていたのが、ドミニコ会の Deák Viktória Hedvig 修道女による *Árpád-házi Szent Margit és a domonkos hagiográfia Garinus legendája nyomán*, Kairosz, Budapest 2005（『アールパード家の聖マルギットとドミニコ会聖人伝』）であった。こちらは同じカイロス社の出版物ながら *Teológia* という別シリーズの第5巻として公刊されたもので、第1～4巻にはエックハルト、ズゾ、タウラー、シエナのカタリナといったドミニコ会神学者たちの原典訳を収める。同新著は、ローマの聖トマス大学での調査を基に、ドミニコ会最初の聖女となったアールパード家の聖マルギットをめぐる新資料を駆使した労作として評価が高い。なお *Teológia* シリーズ以外に、中世関係の原典翻訳叢書として Szent István Társulat 社発行のシリーズ *Középkori keresztény írók*（『中世キリスト教著作家集』）がある。

以下、他の会員の活動を若干紹介しよう。上掲のバーン師と同じく、次に挙げる Ivancsó István, Sivadó Csaba, Orosz Atanáz の三人は、いずれもギリシア・カトリック（GK）の司祭であり、イヴァンチョー師はニーレジハーザ市聖アタナーズ・ギリシアカトリック神学院セミナリウムの管長、シヴァードー師とオロス修道司祭も同神学院教授である。三人が教鞭を取る聖アタナーズ神学院は、ハンガリー唯一のギリシア・カトリック専門神学院として知られる。付設のセミナリウムでは、日々ビザンツ典礼による時課と聖体礼儀が行われ、また同神学院は1995年以降、ローマの教皇庁立東方学院と提携校の関係にある。まず典礼学者のイヴァンチョー師は、ギリシア・カトリック教会からの被選出者として現在教皇庁国際神学委員会委員の地位にある。主著は *Magyar Mózes: Liturgikus tiszteletének tükrében*, Nyíregyháza 1997（『ハンガリー人モーゼシュ』；モーゼシュは11世紀前半の人物、東方教会では聖人）であるが、同神学院の教授用に編まれた一連のビザンツ典礼学教科書は、簡にして要を得ている（*Görög katolikus liturgika*, Nyíregyháza 1999; *Görög katolikus szertartástan*, Nyíregyháza 2000（『儀礼学』）；*Görög katolikus liturgikus kislexikon*, Nyíregyháza 2001（『～小事典』）ほか）。また同師は、ハイレベルで知られる同神学院の紀要 *Athanasiana*（年2回刊行）の責任編集者としても多忙である。一方シヴァードー師は同神学院の教父学講座教授を務める。主著 *Dogmatörténeti és Patrisztikus Vonatkozások John Meyendorff teológiájában*, Nyíregyháza 1997（『メイENDORFF

の神学における教義史的・教父学的観点』)は、メイェンドルフら新教父学者の背景となるビザンツ的伝統の意味を問うた労作である。修道司祭のオロス師は著名な教父学者であるが、ハンガリー北部スロヴァキア国境に位置する寒村ダーモーツにて、ビザンツ典礼による観想修道共同体(司教認可下)活動を実践することで知られ、修道院ビザンツ典礼書の編纂にも力を注ぐ。同師による『月課経』(*Ménea*)のハンガリー語訳完全版出版計画が現在進行中であり、2ヶ月ごとの6巻より成る同経のうち、現在I(9-10月, 2002), II(11-12月, 1998), III(1-2月, 2005)まで、および *Triódion* (『三旬経』), *Pentekosztáron* (『五旬経』)等が刊行済みである。一方教父学領域では、*Hetvenes-bibliás és patrisztikus tanulmányok*, Nyíregyháza 2004 (『七十人訳・教父学論考集』)をはじめ、創世記の七十人訳テキストと教父たちによる注解鎖(カテナ)の系譜を辿った労作 *A görög atyák Bibliája korabeli értelmezésekkel. I. A teremtés könyve*. Nyíregyháza 2001 (『ギリシア教父の聖書-附古代の解釈-, 『創世記』篇』), *Nikolaosz Kabaszilas Liturgia-Magyarázata*, Nyíregyháza 1996 (『ニコラオス・カバシラスの典礼注解』)など、聖書や典礼の注解書を中心に、多くギリシア教父たちの訳注を手がける(なおAtanázは修道誓願名であり、Orosz Lászlóを著者名とする旧著も多い)。

評者の主観的な印象によれば、ハンガリーでは、GKが東北部を中心に根強い教勢を誇り、ビザンツの息吹を伝える一方、修道会ではベネディクト会が強く、スコラ学一辺倒ではないこと、また西南部のペーチには古代ローマ遺跡が残るなどの条件から、スコラ学よりも教父学の方が盛んであるように思える。英・独・仏・伊と異なり、手写本からの本文校訂作業と校訂本出版が難しいという点では日本と事情が似る一方、教会史上の伝承が日常の体験レベルで息づくという面はわが国と大きく異なる。また教父学研究者が、ほぼすべて教父学協会に参画して一大勢力を形成し、出版界や教界・学界との連携の許に活動を展開しているのも、大いに参考にすべき点であろう。